

“顔を拭くんだ、坊主。おれたちには負け犬はいないよ。”

——J・X・トゥール『テン・カウント』

記憶はもうおぼろげだ。だからこそ、思い返す価値がある。そうだろう？

なによりあなたを蘇らせなければならぬ。脳はまるで、海辺に座礁しそのまま錆びれてしまった記録装置。だから再入力しなければならぬ。野良猫しか観客のいない町の片隅、灰色の煉瓦壁に映像を投射するように。

わたしがここにいるのはあなたが闘ってきたからだ。おそらく、それすらもう曖昧だけれど、ねえ、そうだろう。

この老いてしわくちゃになった左腕が、つまめばほよりと伸びるような皮膚が、それを証明している。白い壁の部屋。意識もまた汪洋としていようが、いまここに存在している。

見飽きた窓の向こう、雨あがりの湿った空中を白いハトが滑空して行く。くもりと身をひるがえす。翼は空気をカットしている。ステップを踏むあなたのようにどこかおかしく思う。

昔について思い出していたのは、ただのここ数年の習慣だ。

迎えの朝になるとかならず回想に耽る。誰もいない砂浜によく似た、記憶のなかの甘い風景。それが老人の特権だろう。ガタを騙しごまかし、人生を続けてきた甲斐があるというもの。

いい天気。

あの日もこんな風だったろうか。うつすらと蘇るロケーション。それだけと思う。毎年のように思い描く。いまでもわかるよ。それ

だけは。

あなたのノートを開くと——病院に入ったきり、映像であなたのすがたを観ることを拒んでいるのは、なにも思い出したくないからじゃない。いまや眼で追えない速度の記録よりも、いつかたしかに視ていたその記憶を脳内で発火させたいから。

狭い部屋のなか。

テレビを置いた台の上。

その空間だけはすきだ。

いくつかのトロフィーと、造花の置物が連なっている。

ふたりの人生の春。厳しい冬を乗り越え、燃えるような夏に至る前の季節。暖かくうららかなる。

歳をとると、どうも修辭的な表現がおおくなってしまふ。あなたが見たら笑うだろうか。笑うだろうね。

そのように、遠い感情の揺らぎをいまでは懐かしく微笑ましく思っってしまうように、老いたわたしはノートを開く。若いあなたが、そこにはいる。日記はいつも朝につけていた。

【0924 わたしは少女を形容詞として使うのをすきません—宣言しておくと誰にというわけでもなく—とにかく昨日の取材はかんべんでした—朝のランニングにも行きそこねた—アナウンサーが美人だったのはうれしかったです—このあたりの思考がわがことながら高校生らしい—それでは朝のランニングに出かけます—】

書き終えてから出た外はずしく心地いい。緑の並木道を進み、着いたのはランニングロードのなかごろとして設定している大きな公園の入り口前。あなたはベンチにうずくまって泣いている女を見かける。

朝の六時くらいのことだっただろうか。

やっかいごとはごめん。すこしスピードをあげてさっさと立ち